2026年11月16日説教塾講演**「説教を生かす旧約聖書釈義」**　小友聡

講演Ⅰ「旧約解釈から釈義へ：謎解きとしての「言葉の解釈」」

１．　「あなたは釈義を間違えている」

品川教会を会場にした説教塾に招かれて３度目になる。最初は15年ほど前で、コヘレトの解釈について総論的な話をした。２度目は７－８年前で、コヘレトの具体的なテクスト解釈について、説教の主題となりうる可能性を語った。今日は、旧約の方法論について、テクスト解釈と説教を語る。

今回もお招きをいただいて光栄に思う。毎度、繰り返しになって申し訳ないが、今日も最初に申し上げる。私は説教塾が苦手である。それは加藤常昭先生に対する劣等感、というかトラウマがあるからだ。今から35年前、私が大曲教会の牧師をしていたころ、隣の横手教会で説教塾を開催し、加藤先生に来ていただき、私も参加した。5－6人の説教研修会であった。私は開会礼拝で、出エジプト記4:11をテクストにして説教した。ところが、加藤先生は講演の中で、私の説教を取り上げ、私の釈義が間違っていると指摘された。私は、モーセが「舌が重かった」というヘブライ語「重い」カーベードは、同時に、「栄光」カーボード（語根カーバド「栄光を受ける」）とも読めると説明した。このカーベード、カーボードの両義性はヘブライ語では決して偶然ではない。モーセの訥弁は否定的な意味だけではなく、その訥弁には神の臨在が約束されるゆえに神の栄光を証しすることになる。それゆえ、舌が重いということは、裏を返せば、神の栄光を指し示していることになる。そこに、私たち説教者の慰めがある。そういう説教をしたが、加藤先生は、そもそも説教者の説教は洗練されなければ意味がない。説教者が口下手でいいということはありえない、あなたの釈義は間違っている。そういう厳しい説教批判をなさった。私はがっかりしたというより、ばっさり切り捨てられた、という痛い経験をした。35年前のことだが、以来、私は説教に対する劣等感、トラウマから抜け出せず、今日に至っている。加藤先生が一昨年、天に召されて、とうとう私はトラウマを抱えたまま、説教者としての人生を終えようとしている。

そういうわけで、３度目の説教塾講演ではあるが、私は今日も足がすくむ思いをしている。私は35年前の、あのときの解釈を振り返って、決して自分は間違ってはいなかったと思っている。テクストから説教者の慰めを語ったというささやかな誇りだけでなく、テクスト解釈として正当だと考えている。おそらく、加藤先生はヘブライ語の語呂合わせは意味がなく、そこに解釈の手がかりを見るのは間違いだと言われたのだと私は思う。しかし、たとえば、マタイ3:8「神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」では、「石ころ」（複数形）を意味するヘブライ語アバーニームに、「子たち」バーニームが含まれており、このギリシア語テクストがヘブライ語の語呂合わせを意識して記されているのは確かである。

旧約聖書にはヘブライ語の語呂合わせが無数にあり、それはテクストの両義的、重層的な意味解釈として、見逃してはならないものである。それどころか、その両義的・重層的な意味を見つけることこそがテクスト「解釈」だと言ってもよいのではないか。テクストの、ありうる解釈とは決して一つではない。むしろ多様であって、したがって、テクストがどういう意味を有するかは、解釈者自身がヘブライ語原典においてどのような発見をするか、どのようにテクストを解釈するか、どのようにテクストを読むか、そこに掛かっている。どのような解釈が正しいか、と問うことは「解釈」の本質を問うにあたって「ふさわしい問い」ではない。そもそもテクスト解釈は解釈者自身の読み方に左右される。説教者が「テクスト解釈」において「正しさ」を問うことの是非が問われるのではないだろうか。尊敬する加藤常昭先生を批判することになるが、私は「解釈」と「釈義」という概念を切り崩して、新たに思考する。

２．　解釈と釈義

「解釈」と「釈義」について、私は独自の定義づけをしたい。独自の定義づけ、と言うのは、私が考えていることが、多くの説教者が考えている思考とは異なるからである[1]。逆と言ってよい。私は、テクストの解釈⇒釈義⇒説教、という順序で考える。皆さんは戸惑うだろうが、私にとって「釈義」は特別な意味を持っている。これについて、左近淑先生が執筆した『旧約聖書神学事典』の「釈義」の項目を紹介する。

「釈義 exegesis と言う語は直接ギリシャ語の名詞に由来するが、それは「導く、道を示す、説明する」を意味する動詞 exegeisthai に語源をもつ。テキスト「から導き出す」というよりは、読者を「導き」テキストに至らしめ、さらにその生命的意味（精髄）に至らしめるまでの運動の「道を示す」ことである。

この意味で、聖書釈義とは注解書を読むことではない。聖書そのものを読むことである。ただに語句注釈にとどまらず、本文批評・文献批評・形態批判・伝承史・編集史などの一連の方法論とその実施でことつきるものでもない。その過程において他の関連領域（歴史、宗教史、思想史その他）に新しい光を提供することもあるが、その本来的かつ本質的目的は、聖書の語る告知に聴き従い、聖書を通して神の言（語りかけ）を聞き取り、

[1] ここで私が指摘するのは、たとえば、藤本満『LGBTQ 聖書はそう言っているのか』（イクスス e ブックス）、2024 年、8-11 頁。藤本は、釈義と解釈を分け、釈義を踏まえた上で、現代の諸問題に聖書を適用することを「解釈」と呼んでいる。私はこの方法を否定しない。私がこの講演で考えるのは、聖書からどう説教するかという道筋である。つまり、初めにテクストあり、である。藤本の場合は、聖書をどう現代の諸問題に適用させるかという関心において、答えを提示するための方法論的な道筋を考えている。それは、初めに現代の問題あり、である。そこに微妙な違いが生じる。

それに生かされ、「心が内に燃える」（ルカ 24:32 参照）出来事が生起することにある。釈義はその対象（真の意味では主体）である聖書の性質にそくして定められる。聖書以外に神の言を聴きえぬとする正典ということが聖書の基本的性格であるとすれば、聖書を神の言として読むにいたることが釈義の究極の課題であるはずである。・・・」（227-228 頁）

私はこの説明に魅了された。いや、今も魅了されている。私にとって「釈義」とはこのことだ。ここで「釈義」とは聖書を神の言として読み、そこから説教のメッセージが引き出される、いや、はっきりと見えてくるということではないだろうか。つまり、聖書学的なテクスト解釈よりも、説教黙想をも含むような聖書（正典）の読み取りが「釈義」である。言い換えると、聖書を文献としてではなく、正典として読み、信仰告白に従って聖書の言葉を語るに至るプロセスが「釈義」の本質であり、目的だと言われているのである。左近は本文批評や文献批評、またさまざまな方法論的アプローチに言及はしているが、それらが釈義の本質ではないということは明らかである。釈義において「心が内に燃える」経験をするのだ。つまり、「釈義」は説教者の実存にかかわる、啓示的で、主観的なレベルの聖書の読み取りが含まれる、と言われているのではないか。このような「釈義」は、対象であるテクストよりも、主体である説教者に近くなる。この左近の考え方は腑に落ちる。

そこで、左近はテクストから説教への道筋全体を釈義と見るが、私は「釈義」と「解釈」を区別して考える。釈義は説教への直接的な方向を示すが、その前の段階において、聖書テクストを文献として理性的に、客観的に読む際に（とりわけテクストの最終形態として読む場合に）「釈義」とは区別された「解釈」が存在する。要するに、解釈から釈義へ、というプロセスで説教への道筋を私は考える。

３．　旧約聖書の解釈：「謎解き」

「解釈」という概念を聖書から説明する場合に重要なのは「謎解き」である[2]。この「謎解き」はテクスト（言葉）から、隠された意味を引き出すことである。それは、主として知恵文学において説明できる。箴言の冒頭に知恵の定義がある。

「イスラエルの王、ダビデの子ソロモンの箴言。これは、知恵と訓戒を知り、悟りの言葉を理解するため、義とさばきと公正において、訓戒を受けて、さとくなるため、浅はかな者を賢くし、若い者に知識と思慮を得させるためのもの。知者は聞いて洞察を深め、分別のある者は導きを得る。こうして、格言と比喩、知恵ある言葉とそれらの謎を解釈する。」（箴言一章 1－6 節）

[2] 小友聡「知恵文学のパラダイム転換」、小友/東/飯郷『知恵文学を再考する』、ヨベル、2026 年、の第 1 論文。

箴言によれば、知者の使命は、格言や比喩や知恵のことばの謎を解き明かすことである。箴言は格言の書であり、比喩や知恵ある言葉が記されているが、それらの「謎」（ヘブライ語のヒーダー）を解き明かすことが求められる。つまり、格言は比喩で書かれ、謎である以上、それは解釈されなければならない。たとえば、

「私にとって不思議なことが三つある。いや、四つあって、私はそれを知らない。天にある鷲の道、岩の上にある蛇の道、海の真ん中にある船の道、おとめへの男の道。」（箴言30章18-19節）

上記の格言は、三つ、四つの不思議なことを「謎」として提示している。ここでは、「道」（デレク）という語が謎かけとして機能している。天を飛ぶ鷲も、岩を這う蛇も、海を渡る船も、それぞれ進む「道」は不思議で、追跡不能な謎である。この「道」デレクには、比喩的に「態度」や「支配」という意味もある。4番目の「おとめに向かう男の道」の「道」は、歩行経路だけではなく、結婚への「態度」や、おとめを手に入れる「支配」をも暗示する。そこに「不思議なこと」がある。つまり、男女の愛は謎めいていて、とうてい「知りえない」といういわば駄洒落なのであって、ここに謎かけの落ちがある。言葉遊びではあるが、これは「道」といういわば暗号的言語を用いた謎かけであり、言葉の二義性・多義性による比喩的な読み取り、すなわち解釈的な仕掛けがある。

旧約聖書において「謎解き」が頻出するのは士師記 14 章「サムソン物語」である。

「サムソンは彼らに言った。「あなたがたに謎をかけたい。祝宴の七日間にその意味を解き明かし、言い当てたなら、上質の亜麻布の服三十着と、晴れ着三十着を与えよう。もし、解き明かすことができなければ、あなたがたが私に上質の亜麻布の服三十着と、晴れ着三十着を差し出すのだ。」彼らが「謎をかけてもらおう。聞こうではないか」と言ったので、サムソンは言った。「**食べる者から食べ物が出た。強い者から甘い物が出た。**」彼らは三日たっても謎を解き明かすことができなかった。」（士師記一四 12－14）

上記で、サムソンはティムナの女を妻に迎える祝会を催した。その席で、人々に謎かけ（ヒーダー）をするのである。その意味を解き明かすなら、賞品を与えると。その謎かけとは、「食べる者から食べ物が出た。強い者から甘い物が出た」である。しかし、誰も解けない。そこで、彼らはサムソンの妻を唆し、彼女がサムソンに泣いてせがんだので、サムソンはとうとう答えを教えてしまった。その結果、人々は、こう答える。

「蜜より甘いものは何か。ライオンより強いものは何か」（同一四 18）

サムソンの謎は解き明かされてしまう。どういうことかと言うと、これは、「食べる者」（ライオン）から「食べる物」（蜂蜜）が出て、「強い者」（ライオン）から「甘い物」（蜂蜜）が出る、という意味である。サムソンは宴会の前に、ライオンを殺し、その屍に蜜蜂が巣を作って蜂蜜ができ、サムソンがそれをなめたことから解答は見えて来る。「食べる者」「強い者」は肉食獣ライオンであり、「食べる物」「甘い物」は蜂蜜である。ここでの謎解きは言葉遊びである。しかし、単なる言葉遊びではない。「謎解き」は言葉から新たな意味を引き出すことであり、言葉（ダーバール）の解釈によって成立するということである。

ダニエル書も例に挙げよう。ダニエルも「謎を解く」。

「ダニエルには、優れた霊、知識、さらに夢を解釈し、謎を解き、難問を解決する洞察力が備わっていました。ですから、今、ダニエルをお召しください。彼ならその解釈を示すでしょう。」（ダニエル書五 12）

謎を解く力があるダニエルは、以下のように見事に謎を解き明かす。

「それゆえ、神の前から手の先が遣わされて、この文字が書かれたのです。これが書かれた文字です。『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。』その文字（＝言葉）の解釈はこうです。『メネ』とは、神があなたの王国を数え、それを終わらせたということです。『テケル』とは、あなたは天秤にかけられ、不足と判明したということです。『パルシン』とは、あなたの王国は分割され、メディアとペルシアに渡されたということです。」（同五 24）

上記で、ダニエルは「メネ、テケル、パルシン」という謎を解いた。それは、王の終わりが来るという終末予告である。しかし、それは「メネ」「テケル」「パルシン」というアラム語がそれぞれ単語として両義的な意味を有し、それをダニエルが新たに読み直したにすぎない。この謎解きは言葉遊びであって、ダニエルの「謎解き」は言葉遊びによって、言葉から新たな意味を啓示的に引き出したのである。謎解きとは、ここでも言葉（ダーバール）から隠された意味を引き出すことであり、両義性や多義性を有する言葉を解釈するということである。このことはまさしく知恵文学（また、黙示文学）に本質的な解釈であって、それはまた、言うまでもなく、私が出エジプト記から読み取った、モーセの「舌の重さ」は「舌の栄光」という解釈とも関係している。

４．　新約聖書が継承している知恵文学の「謎解き」

ダニエル書五章 12 節に見られるアラム語の「謎を解く」（アヒーダー）は、その直後にある「難問を解決する」（ミシュレー・キィトゥリーン）と並行している。謎を解くとは難問を解決することだ。興味深いのは、この「難問を解決する」という表現が本来、「結び目」（キィトゥリーン pl）を「緩める・ほどく」（ミシュレー）という意味だということ。「謎を

解く」とは、結び目をほどくということになる。これはヨハネ黙示録で、小羊が封印された巻物を解く幻を連想させる。

「また私は、玉座におられる方の右の手に巻物を見た。その表と裏に文字が記されており、七つの封印がしてあった。また一人の力ある天使が、「封印を解いて、この巻物を開くのにふさわしい者は誰か」と大声で叫んでいるのを見た。しかし、天にも地にも地の下にも、この巻物を開き、見ることのできる者は誰もいなかった。この巻物を開くにも、見るにも、ふさわしい者が誰一人見つからなかったので、私は激しく泣き出した。すると、長老の一人が私に言った。「泣くな。見よ、ユダ族の獅子、ダビデのひこばえが勝利を得たので、七つの封印を解き、この巻物を開くことができる。」（ヨハネ黙示録五 1-5）

上記の「封印された巻物を解く」とは、謎となっている巻物（旧約聖書）を読み解くことである。これは、キリスト（ダビデのひこばえ）が封印を解く、すなわち旧約聖書を読み解くという意味であり、それは、旧約聖書がキリストを証言する預言であることを暗示する。このように、黙示録において「封印を解く謎解き」が旧約聖書に起源していることは明らかである。黙示録にはまた、典型的な謎解きがある。

「この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。」（ヨハネの黙示録一三 17－18）

ここで謎解きが読み手に要求される。新約聖書はギリシア語で書かれているが、このヨハネ黙示録では旧約の知恵的伝統とヘブライ語の知識が前提されている。六百六十六という数字は、ヘブライ語で「皇帝ネロ」を指す。ヘブライ語のアルファベット文字は数字をも意味し、「皇帝ネロ」はヘブライ語でネローン・カイサルと表記するゆえに、「ネローン」の 4 つのヘブライ文字の合計は 306、また「カイサル」の 3 つのヘブライ文字の合計は 360 となる。合計すると、666 になるのである。これはゲマトリアというユダヤ教の解釈技法によるもので、ヨハネ黙示録の著者はこれを用いて謎解きをせよ、と読者に求めた。つまり、「第二の獣」（十三 15）である冷酷なドミティアヌス帝（AD90 年代）を「ネロの再来」として指し示し、警戒せよというメッセージをほのめかす。数字の解釈も、言葉（ダーバール）の解釈である。ヨハネ黙示録も旧約知恵文学の伝統によって、テクストの解釈、謎解きを読者に求めている。それを解くことがまさしく「解釈」である。

知恵文学の「解釈」について、新約聖書で最も重要なのは福音書のたとえ話である。

「イエスはたとえを用いて多くのことを教えられ、その中で次のように言われた。「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が

来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐに芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ちた。すると、茨が伸びて塞いだので、実を結ばなかった。また、ほかの種は、良い地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍になった。」そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。」（マルコによる福音書四章 2－9 節）

「また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。『種を蒔く人』は、神の言葉を蒔くのである。道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い取る。石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために苦難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。また、茨の中に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が入って来て、御言葉を塞いで実を結ばない。良い地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」（同四章 12－20 節）

主イエスは弟子たちに喩え話を語り、そのたとえを自ら解き明かしている。それは「喩え話」という言葉（ダーバール）の「謎解き」をしたのであって、「喩え話」から意味を引き出すことである。しかも、その謎解きの内容は極めて現実的あり、実際的である。これは、箴言にあるような格言の謎解きを想起させる。この福音書の喩え話とその説明は、明らかに旧約知恵文学の解釈的営みの延長線上にある。それどころか、煎じ詰めて考えるならば、旧約の知恵的解釈は新約聖書を産み出したと言えるのではないか。そもそも新約聖書は旧約聖書の「謎解き」だからである。

５．　「謎解き」としての解釈から釈義へ、そして説教へ

「解釈」という概念について議論をしてきた。解釈とは聖書の言葉から、隠された新たな意味を引き出すことである。それは「謎解き」であって、知恵文学においては、言葉（ダーバール）の両義性・多義性・比喩を読み解くということである。そのような「解釈」は、テクストの最終形態において言葉を読み直すということ。私はそれを「解釈」と呼び、釈義とは区別する。釈義は、そのような「解釈」から見えてくる事柄を、正典および信仰告白に基づいて、解釈者に引き寄せて、キリスト論的に、あるいは教会論的に思考する営みだと私は考える。釈義はすでに黙想を含んでいる。なぜならば、「釈義」は客観的ではなく、左近が述べたように、解釈者の「心が内に燃えるような」主観性に突き動かされる、啓示的な読み取りだからである。解釈⇒釈義⇒説教、という順序がこれで説明できる。

本文批評、文献批評、様式史、伝承史、編集史などの解釈学的方法論について触れなかった。それらは「解釈」の前段階に含まれるが、あくまでテクスト最終形態での解釈を私は「解釈」と呼ぶ。注解書はそのような「解釈」を助ける資料である。

解釈、釈義、説教という順序は、主日礼拝説教を準備する一週間のプロセスとも関係する。月曜日にヘブライ語テクストを読み、火曜日に本文批評・文献批評・様式史・伝承史・編集史という方法論で書かれた注解書を読み、水曜日にテクスト最終形態においてテクストの言葉を解釈する。ここまでが「解釈」である。木曜日に「釈義」の段階に移行する。金曜日に「内に燃えるような」熱い心でテクスト（正典）を読んで黙想し、土曜日に説教原稿を執筆する。主日説教に至る過程をこのように私は説明する。

35 年前の説教塾で、私は出エジプト記のテクストから、モーセの舌の重さが絶望に終わらないことを読み取った。「舌の重さ」は、辞書的には話がゆっくりで雄弁でないことを意味し、ユダヤ教では訥弁というより、むしろ「滑舌が悪くて話がうまく聞き取れない」という意味でもある。いずれにせよ、モーセは民の指導者として洗練された存在ではなかった。しかし、神はモーセと共にいることを約束した。逆に言うと、神がモーセに寄り添うことは、モーセの舌が重いからにほかならない。それは、舌の「重さ」が「栄光」となることに結びつく。まさしく文字通り、カーベードはカーボードと両義的である。その言葉の発見は私を鼓舞した。「心が内に燃える」ような発見と言ってよい。それを私は説教において語った。このようにテクストを私が解釈したことは、テクストの言葉を謎解きし、言葉において生けるキリストに出会ったということである（ルカ 24:32！）。先に述べた解釈、釈義、説教というプロセスがそこにある。

そもそもプロテスタントは聖書の「言葉」で生きる。日毎に「言葉」を食べ、「言葉」のみで生きる。「言葉」は分からなければならない。そのために言語的知性が要求される。幻や夢でもって感性的に言葉を知ることを退け、M.ウェーバーが言う「脱魔術化」に徹する。御聖体ではなく、言葉においてキリストに出会い、言葉において救済を体験する[3]。言葉で生きるプロテスタントは、あらゆる聖書学的な知見を是とし、それを拒まず、それにひるまず、そこから撤退しない。聖書の歴史批評学は宗教改革から始まった学問である。プロテスタントは徹底的に聖書の言葉を探究し、聖書の言葉から、生きるべき言葉を、語るべき言葉を見つけ出す。その見出された「言葉」で生きる。聖書の　解釈と釈義は、説教に向かって説教者が辿る必然的な過程を説明している。私はそう考えている。

---

[3] 今年６月、長崎で高見三明名誉大司教とお話する機会を得た。その際、高見大司教は「宗教改革以前、聖書は教会で読めるものではなく、活版印刷術によるドイツ語聖書の大量印刷によって宗教改革者たちが聖書を読めるようにした。しかし、カトリックでは本来、聖書は人々が自由に読めるものではない。その意味で、今日においても、新たな聖書翻訳やその普及についてカトリックはプロテスタントほど熱心ではない」と言われ、私は腑に落ちた。